様式 C-7-2

自己評価報告書

平成 22 年 4 月 1 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2010
課題番号：19520397
研究課題名（和文）　鎌倉時代における日本漢音の位相的研究
研究課題名（英文）　A Study of the Phase of Kan'on(漢音) in Kamakura Period

研究代表者
佐々木　勇（SASAKI ISAMU）
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：50215711

研究代表者の専門分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・日本語学
キーワード：日本語史・漢音

１．研究計画の概要
初年度から三年目までで、データ入力を完了する。
最終年度は、目的とする、鎌倉時代における日本漢音の位相的研究を行なう。

２．研究の進捗状況
（1）研究方法
本研究の方法は、鎌倉時代の原本から、字音注を抜き出し、各資料の性格を考慮しつつ、漢字音注を整理する、というものである。
（2）研究の進捗状況
現在のところ、計画通り、書陵部蔵『春秋経傳集解』全三十巻・鎌倉期点、毛利博物館蔵『史記』院政期点、東洋文庫蔵『論語』鎌倉期点、同『中庸』鎌倉期点、東京国立博物館蔵『群書治要』鎌倉期点の漢字音データを、コンピュータを用いて入力することを終えている。
さらに、本予算により新規購入の『増補親鸞聖人真蹟集成』（全十巻）に基づき、親鸞遺文の漢字音データの入力を開始し、その入力をほぼ完了することができた。
そのデータを活用した研究の一つとして、親鸞とその妻恵信尼との、鎌倉時代における一夫婦の漢字音を比較し、同時代・同地域における漢字音の個人差を調査してみた。
その比較の結果、親鸞は、どのような文献であっても、各漢字の音について規範的な音注をしているのに対して、恵信尼は、経の音読では、漢字の字音に戻すことなく、句として聞こえるままに記す部分が有ることが知られた。その恵信尼は、書簡では、日常漢語音のレベルに留まっていたことがわかった。
このように、鎌倉時代の夫婦の漢字音に、相違が見られたのである。
今後も、このように、蓄積したデータに基づき、諸資料の加点者、文献の性格・場の相違による漢字音の差を考慮し、漢字音を整理・比較研究する予定である。
以上、本研究全体としては、進行計画通りに進んでいる。

３．現在までの達成度
②おおむね順調に進展している。
（理由）
予定したデータ入力を完了し、研究の段階

に進んでいるため。

４．今後の研究の推進方策

今後は、計画通り、データの整理・分析・研究のまとめを行なう。

その際、諸資料の位相差、同一人物による文献の性格･場の相違による漢字音の差を考慮し、漢字音を整理比較する予定である。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①佐々木勇、鎌倉時代における漢字音の個人差　―親鸞と恵信尼との比較―、『古典語研究の焦点』（武蔵野書院）、巻なし、721-738 頁、2010 年、査読無し。

②佐々木勇、大東急記念文庫蔵『仁王護国般若波羅蜜多経　巻下』（二五―五二―一〇六五）の字音点、かがみ（大東急記念文庫）、第 40 号、2009 年、7-9 頁、査読無し。

③佐々木勇、国宝本『三帖和讃』の研究資料と朱筆について、『増補　親鸞聖人真蹟集成』第三巻（法蔵館）、381-390 頁、2009 年、査読無し。

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計１件）

①佐々木勇、平安鎌倉時代における日本漢音の研究、汲古書院、研究篇 1068 頁・資料篇 690 頁・全 1758 頁、2009 年、査読無し。